



養浩園（岡山家住宅庭園）

旧美和村の高部宿に位置する養浩園は、水戸の偕楽園を模して造られ、明治中頃に整備された面積約3,000㎡の回遊式庭園です。江戸時代に県北地域特産の和紙を扱う水戸藩公許の在郷の紙問屋で、明治6年（1873）に酒造「花の友」を創業し、平成初年まで醸造していた岡山家の敷地内にあります。令和元年（2019）6月には、文化財庭園保存技術者協議会の実技技能研修会場として、剪定や修復が行われました。今回は、この養浩園についてご紹介します。

偕楽園との共通点と養浩園の特徴

養浩園は、北側が東西に伸びる道路（県道常陸太田・烏山線）に接し、西側は宅地となっています。敷地の南側は切り立った岩山に面し、その山裾に緒川が流れています。東側に和田川が流れ、ちょうど緒川と和田川との合流地点に位置しています。

園内には、池、中島、橋、四阿、氏神の社があり、梅の古木が多く植栽されています。また、推定樹齢200年のヤシオツツジの単木と株立ちがあり、5月頃には真っ白い花を咲かせます。



▲写真1：喜雨亭とヤシオツツジ

養浩園は偕楽園を模して造られたと伝わっているように、園内にある木造3階建ての喜雨亭も、庭園と同様に偕楽園との共通性が見られます。喜雨亭は、明治20年（1887）頃に偕楽園の好文亭を模して造られたと言われています。庭園は喜雨亭や主屋の2階から眺めていたと考えられ、当時、岡山家には文人が集い、四季折々

の景色を眺めながら詩を作り、宴が開かれました。

また、偕楽園が民衆の憩いの場とされていたように、養浩園も近隣住民に開放され、岡山公園と呼ばれて子供たちにも親しまれていました。冬には園池が厚く氷結して、多くの子供たちが下駄スケートを楽しみました。



▲写真2：門（復元）



▲写真3：養浩園内の池

他にも、庭園には地域的な特徴が見られます。例えば、庭園全体の庭石には養浩園の対岸の山の石が用いられています。流れには周辺で採取したチャートなど特徴がある石材を要所に配置しており、石材にもこの地域の特徴が現れています。

また、対岸の急な山の斜面に露出している岩盤や好文亭を模した喜雨亭がある養浩園は、文人・煎茶的空間として、自然豊かな環境を持っているといえます。

養浩園は現在一般公開しておりませんが、集中曝涼時に特別公開の機会を設ける場合もございますので、その際にはどうぞ見学ください。

【参考文献】

株式会社環境事業計画研究所編著『「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」文化財庭園保存技術 研修報告書—岡山家住宅庭園—』文化財庭園保存技術者協議会、2019年
美和村史編さん室編『美和村史』、1993年